

紅花商人と花風呂敷について

県立米沢女短大 徳永幾久

目的 山形は近世初頭外様大名である最上義光氏50万石が領有していたが元和8年最上騒動により大方は収公された。以来藩主は目まぐるしく交代したがその多くは左遷大名であつた。明治3年廢藩となる。このような特殊な領地形態は領民の政治経済政策にも領主的統制がゆきとどかず、商品の生産流通にも特色ある地主制を發展させ、更に藩の財政貧困は商人の財力に頼ることとなり、自然富豪の發達を促進する形となつた。この豪商の多くは最上特産の紅花の荷主であり、花摘期の市場では紅花を集荷する目早や手代などの仲買人が活躍した。この花風呂敷は豪商の牛代として働く在方商人の内儀が紅花問屋などを通じて京文化に接触し、豪商の京染の家紋入大風呂敷をまね、家紋や商売繁盛の吉祥文を刺して主人にもたせ、また店の棚物に掛布として使つた風呂敷である。そこで本報はこの風呂敷の時代的模様構成の變化や、その刺し縫いの由縁について考察する。

方法 実物拝訪調査による事例比較、収果物および庫きとり結果より考察した。

結果 刺し風呂敷の模様構成は初期のものは①紺木綿に縫紋②刺し紋の周囲に吉祥文③全体に吉祥文 宝づくしの散らし文、後期の物は古手物や手許織の小切れと紺木綿を格子 または縞に接ぎ合せ、紺地に鶴亀、松竹梅、瓢箪、扇子、麻の葉、牡丹、鯉、独果などの吉祥文を刺したものである。用途は始めは目早、牛代などの包み布として使用した。後にはおしめ簪や産蒲團に、または倉の棚物に掛布として使つた。即ち在方商人は風呂敷に家紋をよく事により商家意裁を寓の、更に長寿福貴を願い、刺し模様を加えたのであり、商家の刺し縫いの意図が察知できたのである。